

ブラトーン哲學資料論補遺

三 井 浩

年表の典據

上掲「ブラトーン著作年表」中、外的傳記に屬する諸項目の年代の典據について少しく書き添へておき度い。

一、ブラトーン誕生。四二七年春または夏。

上述D・Lの二、年代の項のアポロドロス及びヘルミッポスの兩者を用ゐ、第八十八オリュムピア期の第一年（四二八―七）となる。此の年はアテーナイのアルコン・ディオティモスの時（四二八年七月二十九日より四二七年七月二十四日まで、ウィラモウヴィッツ「ブラトーン」一卷三五頁による）誕生とする傳承（ヤコビ、アポロドロス年表）とも一致する。またソークラテースの死（三九九年三月、後出）後ブラトーンが二十八歳の時メガラに赴いたとする上述ヘルモドロスの證言とも一致する。更にソークラテースの死はブラトーンの二十七歳の時とするピロデーモス（出典、ユ・プレヒテル一八一頁）（之れは滿で算へてゐる）とも一致する。さうして四二七年三月生れならばソークラテースの死の時、滿二十八歳となる故に、其れ以後の生れとなり、七月二十四日以後はアルコン・ディオティモスの時ではない故に、それ以前となつて、四二七年四月より七月二十四日までの間に誕生と推定される。後世のアカデミーコイガタルゲーリオン月（五月半より六月半）七日（アポローン生誕月日）とした虚構は當らずと雖も遠くない。或ひは本當にアポローンの誕生日に生まれたのかも知れぬ。

二、ソークラテースに親炙。二十歳（四〇七年）頃。

これに就いては上述した（六月號四二頁）。

三、ソークラテースの死。三九九年三月。

D・L(二ノ四四)に、アポドーロスの「年代記」及びデーメトリオスを典拠として、第九十五オリュムピア期の第一年（四〇〇ノ三九九）七十歳を以つて終る、とある。然るに「バイドーン」の巻頭に見えてゐるが如く、裁の前日にデーロス行の船の舳が神官によつて飾られたため、死刑が延期された。このデーロスはアンテステリオン月（二月半より三月半）に行はれる。従つてソークラテースの死は三月下旬であり、而してギリシャの一年は七月半を以つて始まる故に三九九年歿となる。

四、メガ行。同年。

典拠は既述した（六月號四二頁）。

五、旅。三九〇年―三八八年頃。

典拠。書翰第七、イタリア・シラクサ行四十歳頃（三八八頃）。これに先つてエジプト・キュレーネー行並びに當時の政治的軍事的状態より出途の年代を推定。

六、アカデーメアに學園建設。三八七年頃。

上述の如くD・Lを典拠として、歸國後間も無き頃を適當な年と認めた。

七、テアイテートス戦病死。三六九年。

テアイテートスの出征せるコリントス附近の戦は、クセノポーン「ヘレーニカ」七卷一ノ一五以下に見えてゐる戦と推定される。此の戦はエドワード・マイヤー「古代史」第五卷九五二節（四三〇頁）並びにBoyの「ギリシャ史」六〇七頁以下によつて三六九年と

されてゐる。

八、アリストテレース入門。三六七年。

典據ヤコビ「アポロドーロス年代記」に三六七、六年とあり、D・L(五ノ九)に「アポロドーロスの年代記」を典據として、第九十
九オリュムピア期の第一年(三八四、三年)に生まれ、十七歳の時プラトーンの許に留まる、とある。即ち三六七、六年なり。今三
六七年とせるは「バルメニデース」著作期をシラクサ行前と考へしため。別に典據なし。

九、第二回シラクサ行。三六六年—三六五年。

此の旅の誘因となつたディオニシオス一世の死は^{*}ディオドーロス(一五ノ七三)によれば第百〇三オリュムピア期の第一年(三
六八/七)であり、マイヤー(「古代史」卷五、四九八頁)は三六七年春としてゐる。プラトーンの出発はその一年位後而して一年間
位淹留したと第七書翰によつて推定される。

十、第三回シラクサ行。三六一年春—三六〇年春。

プラトーンの第三回シラクサ到着少しく後、日蝕があつた(ブルータルコス「ディオーン傳」十九ノ四)。其の頃の日蝕月日は三六
一年五月十二日である。故にプラトーンのシラクサ行は三六一年春となる。また第七書翰(三五〇b)によれば、プラトーンはシラ
クサを去つて後ペロポネッソスでオリュムピア祭の時ディオーンに逢つたといふ。然るにオリュムピア祭は夏至(六月二十一日
頃)に行はれる、故にシラクサを去つたのは春と推定される。

十一、エウドクソスの死。三五五/四年。

ヤコビ「アポロドーロスの年代記」に三五五/四とあり。これが通説。然るにD・Lの譯者ヒックスは三五七年となす。理由不明。

十二、ディオーンの死。三三三年。

プラトーン哲學資料論補遺

デイオドロロス(十五卷三一ノ七)に第百〇六オリ、ユムピア期第三年(三五四/三)にデイオーン、カリッポスに殺さるとある。これはネーポスの「デイオーン」傳(一〇)に「ペロポンネッソスよりシケリアに歸りし年より四年の後」とあるに一致する。デイオーンのシケリアに歸つた年は三五七/六(デイオドロロス十六卷九―十三)である。従つて三五三年の方が有力である。上掲「著作年表」に三五四年とあるを三五三年と改める。三五四年とする學者は英佛に多い。テイラー(「ブレイトー」の年表)、ロバン(「ブラトーン」二八頁)、Bury(「ギリシャ史」六七二頁、三五四年六月とす)但しドイツにもアーベルト(「ブラトーン書翰集」二二八頁)あり。一般にドイツではウイラモーヴィッツ、ホフマン、ブレヒテル、シュテンツェル等皆三五三年説。マイヤーによるのであらうか(「古代史」卷五、五二二頁)。英國でも「ギリシャ研究の伴侶」の年表には三五三年とある。以上シラクサ關係の年代についてはマイヤー「古代史」卷五に負ふ所頗る多い。

十三、ブラトーン死。三四七年。

生年を四二七年とせる必然の結果である。

* デイオドロロス「歴史文庫」。後半断片の部分がブラトーンの晩年のシラクサ關係事項の年代推定に役立つ。この著書はおそらく前三七―三〇年には現はれたとされる(Oldfather: *Diodoros I. introd.* p. Xi n. 2.)。 (完)